

# 道化への報酬

紫 李鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

会社を辞めたかったが、他に何ができるのか分からずにいた。そんな時、久し振りに会った友人が潰刺としているのを見て、現状の自分がちっぽけに思えた。

3 2 1

目

次

9 5 1

八年勤めたものの、どうもサラリーマンは性に合わなかつた。大して大きくもない会社でありながら、一丁前に派閥とやらがあつて、虫が好かない上司の顔色を窺つては、追従に必死になつていた。それが間違いだと気付きながらも、その小さな組織の色に当然のように同化して、自分を見失つていた。

そんな時、久し振りに会つた大学時代の友人が、対照的に潑刺はつらつとしているのを目の当たりにして、現状に置かれた自分の存在があまりにもちつぽけに思えた。

「——俺も初めは、今の仕事が合つてるかどうか半信半疑だつたんだが、働いて三日目ぐらいしてか、ちょっとしたきつかけで喋り出したら、出るわ出るわ。立て板に水よ。それがまたウケるもんだから、調子に乗つちゃつてさ。ああ、これが天職だつて、ピーンと来たね」  
榎田は学生時代から確かに口が立つた。ムードメーカーで、その場を賑にぎやかにしたり、和ませたりはお手の物だつた。小太りで愛嬌あいきょうのあるその面持ちは、当時、偏つた持論を心に掲げて神経を尖らせていた俺を癒してくれた。

「……俺にも、……できるかな?」

「……今、なんて言つた?」

予想だにしなかつたのか、聞き違いだと思つた榎田は、ジョツキを口元から離すと聞き返した。

「お前の店で、一緒に……」

「……マジかよ」

「ああ。……試しにさ」

俺は自信のない目を向けた。

「あんらあ、ヤーさん。いらつしゃ〜い」

タヌキが真つ赤なマキシ丈のドレスで客を迎えた。

「その、ヤーさんはやめろよ。ヤクザみてえに聞こえつから」

客の矢田は、迷惑そうに言いながらも満更ではなかつた。

「あんら、いつもヤなこと言つていじめつから、ヤーさんなのよ。も、  
やうだ」

矢田のボトルを開けながら、タヌキが脂やにのついた黄土色の歯を覗のぞかせた。

「いじめられてんのは、こつちだろが。……あれつ。昨日キープした  
ボトル、もう、一口もないじyan」

矢田が考える顔で、残り少ないボトルを不思議そうに見た。

「ハイツ！ボトルをとりましょう。矢田さま、何する、かにする、ナポ  
レオン？それとも手頃な大五郎？しみじみ飲むなら大五郎。」  
ショーが観たけりや、ナポレオン！」

「大五郎！」

矢田が弾みで答えた。

「ハイツ！しとしとびつちゃん、一本！」

「ハイツ！焼酎が出るぞ、焼酎が出るぞ、みんな飲みましょ、ハ  
イツ！」

カウンターの中では客の相手をしていた色黒のママ、カラスが、そう  
歌いながら、棚から焼酎を出した。

「……どうも、いらっしゃいませ」

他の客席にいたスズメが、カラスから手渡された焼酎を持つてき  
た。

「あ、ヤーさん。紹介するわ。今日からなの」

タヌキが紹介した。

「スズメです。よろしくお願ひします」

「あらつ、キレイじゃん。俺、こつちのほうがいい」

矢田がスズメの腕を引っ張つた。

「フンだ。ほら、スズメ、そこのけそこのけ、タヌキが通る」

スズメを尻で押しのけると、手洗いに行つた。可愛いをアピールす  
るかのように、ピンクのドレスを着たスズメが矢田の横に座つた。  
「スズメちゃんだけ？」

「ええ」

「一緒に飲も」

「はい、いたします」

微笑を浮かべながら、付けまつげをパチパチさせた。

タヌキが榎田で、スズメが俺。白々明けの街を、十五分ほど歩いて、ひやくにんちよう百人町のアパートまで帰る。——酒の臭いと、化粧の残滓をシャワーで洗い流すと、バタンキュードラム。

生活は一変したが、苦ではなかつた。むしろ、夜の勤めのほうが快適だつた。起きるのは、午後の二時～三時。コーヒー好きの俺は、起きたらまず湯を沸かす。ポツトの生温い湯で淹れたコーヒーほど不味いものはない。ハンドドリップにペーパーフィルターをセツトし、ブルマンを匙に大盛り五杯。全体を温らすと、三十秒ほど待つ。徐々に湯を注ぎ、サーバーの四杯分の目盛りでストップ。濃いコーヒーが好きだつた。コーヒーと煙草。それが俺の朝食だ。サラリーマン時代からの習慣だつた。

俺には、四年ほど付き合つてゐる恋人がいる。勿論、今の仕事のことは言つていない。四角四面な女だ、莫迦にされるのは目に見えていた。埼玉の実家から通うOLの芳美は平日は来ない。部屋に来るのは休日に限られていた。長年付き合つてゐる馴れ合いからか、電話をすることも寄越すことも滅多になかつた。

新聞とテレビを観て、食事の時間までを過ごす。自炊はしない。近所の定食屋で、俺にとつてはランチの日替り定食を食べる。魚あり、肉あり、野菜ありだ。だから、食事のバランスは悪くない。

出勤すると、ドレスに着替え、化粧をする。支度が整つた瞬間、遊び半分で足を踏み入れた職業に、僅かばかりの躊躇いが生じる。だが、自分に何が向いているのかの天職を探る手段として選んだ道だ、「誇りを持つ」そんな自らの激励で気合いを入れた。

そんな休日のこと。

「——まだ寝てんの？」

芳美の声で目を覚ました。

「もう、夜になつちゃうよ」

甘つたるい芳美の声が耳を撓くすぐつた。

「……う」

俺は薄目で芳美を確認すると、寝返りを打つた。

「ん？……ファンデ臭い」

「……！」

芳美のその言葉にアツと思つた。店で化粧を落としたものの、帰宅してシャワーを浴びていなかつたのだ。

「……昨夜<sup>ゆうべ</sup>は上司の付き合いで、朝方まで呑んでたから、……ホステスの化粧がついたんだろ……」

「まあ、そんな濃厚なチークダンスしたの？」

「じゃないよ。ベタベタくつつく女つているだろ？上司の指名してるとホステスだから、邪険にもできないさ」

俺は背中を向けたままで、話を作つた。

「フン、どうだか。ま、いいわ、許したげる。ね、それより、夕飯、何がいい？」

「……任せるよ」

「も、いつもそうなんだから。じゃ、スーパーまで行つてくるね」

「……ああ」

生返事の後、芳美が出掛けると、ベッドから飛び降りてバスルームに向かつた。

……まずいまずい。気を付けないと。

二十分ほどで戻ってきた芳美と、馴れ合いの肌を合わせた。――

母親直伝の芳美の手料理を頂きながら、結婚の話を持ち出さない己の卑怯さ<sup>ひきょう</sup>を痛感していた。芳美も芳美で、恬淡な性格もあつてか、結婚したい旨<sup>むね</sup>を口にするような女ではなかつた。それには、母一人、子一人という境遇も関係しているに違いない。責任を負いたくない俺にはそれが救いだつた。自由に生きたい俺は、家庭を持つことによ過度のプレッシャーを感じていた。

そんなるある日、客の矢田が女を連れてきた。その女を見た途端、俺は羞恥心で赤面した。その女が俺の素顔を知る由<sup>よし</sup>もないのに、まるで素っぴんでドレスを着ているような錯覚を覚えた。

「あんらぐ、ヤーさん、いらっしゃい！」

タヌキがいつもの愛嬌で迎えた。

「だから、その、ヤーさんはやめろつてえの」  
ボケとツッコミのように、矢田が返した。

「あんらー、こちらの美女はどなた？」

二十歳ぐらいだろうが、女は矢田に付き添うように、控えめな素振りで笑みを湛えていた。

「指名してるクラブの子で、マミちゃん」

矢田がおしごりで手を拭きながら、紹介した。

「まあ、マミちゃんて言うの？ あたち、二十歳のイタチ。じゃない、三十路のタヌキ。味噌汁のたぬき汁じゃないわよ。さあ、お手をどうぞ」

マミはクスクス笑いながら、グローブのようなタヌキの手からおしごりを受け取った。

「まあ、綺麗な手」

マミの細い指先を掌に載せた。

「こらつ、タヌキ。気安く触るんじやねえ。俺も触つてねえのに」  
ぶつくさ言いながら、ヘルプが作つた焼酎のウーロン割りを手にした。

「あんら、オカマの特権よ。おほほほほ」

口に手を添えて笑つた。

「後でスズメちゃん、呼んで」

「分かつてるわよ。マミちゃんは何飲む？」

タヌキが訊いた。

「同じもので」

「けど、マミちゃん、店でも呑まないじやん。無理しないで、何か甘いもの作つてもらおうか？」

矢田が氣を遣つた。

「じゃ、お言葉に甘えて」

マミが遠慮がちに言つた。

「タヌキ。何か飲みやすいのを作つてあげて」

「はいよ。じゃ、果実酒をお作りしましょう。ママー、ライチ生、グレヒ

「ちゅ！」

「ハ～イ！ライチ生グレ、喜んで～！」

客の相手をしていたカラスが、カウンターの中から返事をした。

「……いらっしゃいませ」

カラスから受け取つたライチ生グレを手に、スズメが挨拶に来た。  
「おう、スズメちゃん、僕の横において」

矢田が手招きした。

「ほら、スズメ。そこのけ、そこのけ、タヌキが通る」

タヌキはいつもの文句を言うと、スズメを尻で押しのけた。

「紹介するよ、マミちゃん。こつちはスズメちゃん」

矢田が紹介した。

「どうも、ようしく」

一瞬、仕事を忘れて、男口調になつた。

「初めまして……」

マミが微かな笑みを浮かべた。

「あ、どうぞ」

指先が微妙に震えるのを感じながら、マミの前にグラスを置いた。

「あ、どうも。じゃ、矢田さん、いただきます」

マミがグラスを上げた。

「乾杯」

矢田が、手にしたグラスをマミのグラスに当てる。

「あ、スズメちゃんも何か飲みな」

丸椅子で淑やかな笑みを浮かべていると、矢田が声をかけた。  
「はい、いただきます」

焼酎の梅干し割りを作りながら、矢田と話すマミの顔をチラチラと見ていた。そして、こんな格好の時にマミと出会いたくなかつた、と思つた。

帰宅してもマミのことが気になつていた。酒も飲めない、素人っぽい子が水商売で働くからには余程の事情があるのだろう……。

その翌日だつた。仕事を終えたマミが一人でやつて來た。そして、俺を指名した。

「昨夜はありがとうございました。楽しかつたです」

ピンクのツーピースの胸元に、ソフトウェブの毛先が載つっていた。

「いらっしゃるこそ、ありがとうございます」

目を合わせると、マミが恥ずかしそうに微笑んだ。

「昨日と同じ飲み物でいい?」

「ええ」

マミは返事をすると、バッグから刺繡ししゅうを施した白いハンカチを出して膝の上に置いた。俺は腰を上げると、カウンターのカラスにライチ生グレを注文した。

マミのことを色々知りたかったが、まずはたわいない会話をしながら、探つてみた。——そして、水商売はまだ短いと言うマミは、父親を事故で亡くし、弟の学費と母親の入院費を稼ぐためにクラブで働いていると打ち明けた。その時の寂しそうなマミの顔が脳裡のうりから離れなかつた。

俺は何か役に立ちたくて、マミの売上に貢献するために店に飲みに行つた。最初は、ジヤケット姿の男が俺だとは気付かなかつたようだが、

「……スズメさん?」

と、自信なさげに訊いた。

「ああ」

「……、んなことまでしていただきて、……ありがとうございます」

素のままで来てくれたのがよほど嬉しかつたのか、マミはハンカチで目頭を押さえた。

そして、マミの助けになればと、大した蓄えはなかつたが、少し融通した。すると、お礼にと、ラブホテルに誘つた。

「そんなつもりじゃ……」

「ええ、分かつてゐるわ。でも、私がそうしたいの。……あなたのことが好きだから」

マミはそう言つて、すがるような目を向けた。そして、マミの弾むような乳房に触れながら、その若い肉体に溺れるのを感じていた。――

マミを知つてからは、芳美を抱けなくなつていた。

「上司との徹夜麻雀で疲れた」

そんな嘘を言い訳にして……。

それで芳美が勘付いたのか、

「……母の具合が良くないの。暫く行けないわ」

そんな電話を寄越して、来なくなつた。

俺はこれ幸いとばかりに、マミと頻繁にラブホテルで会つた。そして、その度に、幾らかの金をやつていた。――そんな関係が数カ月ほど続いた頃だつた。気が付くと、蓄えが底を突いていた。

そんな時だつた。開店して間もなく、矢田が血相を変えてやつて來た。

「マミを知らないか?」

「来てないけど、どうしたの?」

ただ事ではない矢田を、タヌキが心配した。

「……騙された」

矢田が肩を落とした。

「騙されたって、何を?」

矢田の肩に手をやると、座らせた。

「……金を」

矢田のその言葉に俺は愕然とした。心当たりがあつたからだ。  
「金つて、いくら？」

丸椅子のタヌキが、親身になつて訊いた。

「百万ぐらい」

「百万？」

タヌキが驚いた。

「老後の生活費にと、コツコツ貯めた金だつた」

「どうして、そんな大切な金をやつたの？」

「弟の学費と母親の入院費が必要だと言われて」

(!……)

俺に言つた内容と同じだつた。……俺も騙されたのか？

「月末に少し払えるからと言うんで店に電話したら、辞めたつて。行  
方を眩くらましやがつた」

「……そんな子に見えなかつたけどね」

タヌキがため息を吐いた。

「俺だつてそうだよ。清潔感があつたし、うぶ初な子だと思つてたよ」

矢田は、ヘルプが作つた焼酎のウーロン割りを一氣に飲み干した。

……俺も、矢田同様に餌食にされたのか。深い失意の底に落とされ  
た思いだつた。

それは、出勤前のコーヒーを飲みながら、テレビのニュースを観て  
いる時だつた。

「——詐欺の疑いで逮捕されたのは、クラブホステス、田淵浩子容疑  
者、23歳で——」

「アツ！」

思わず声が出た。テレビに映つたその顔は、紛れもなく、マミだつ  
た。

「——調べによると、店の客を言葉巧みに騙し、相当の金銭を得ていた  
とのこと。他にも余罪があると見て、捜査しています」

……詐欺容疑？最初から金が目的だつたと言うのか？あの微笑み

も、あの涙も、すべてが演技だったと言うのか？

初めて出会った時に抱いた、マミへの淡い恋心が、俺は、……悔しかつた。

それは、雨の夜だった。店の前で拾ったタクシーに客を乗せると、ビニール傘を差して見送っていた。走り去ったタクシーにお辞儀をしていると、後方から走ってきたバイクの音と共に、ヘッドライトが俺の背中を照らしていた。振り向いたそこには、俺を目掛けてくるバイクの眩しいライトがあつた。――

足に怪我を負つた俺は入院を余儀なくされた。あの事故の時の俺の姿は滑稽だつたに違いない。おかげかつらは脱げ、唇からはみ出た口紅は、『おてもやん』のように頬紅になつていた。それにしても大した怪我じゃなくて良かつた。それに、バイクの運転者の前方不注視による過失が認められ、治療費や失業補償などで当面の生活は保障された。

見舞いに来た榎田から貰つたピンクのガーベラがある病室の窓からは、鰯雲が覗いていた。榎田に不釣り合いな可憐な花を見た時は、その対照に失笑した。そんな、昨日のことを思い出していると、ノックがあつた。思い当たるのは、榎田ぐらいだ。また来てくれたのかと思ひながら、

「はい、どうぞ」

と答えた。だが、違つていた。開けたドアのそこには、作り笑いをした芳美の顔があつた。俺が驚いていると、

「大丈夫？お見舞いに來たわ」

そう言つて、手にしたオレンジ色のガーベラを肩口に上げた。

「……ありがとう」

「あら、ピンクのガーベラ、綺麗」

そう言いながら、同じ花瓶に挿していた。

「……どうして、知つたんだ？」

「どうしてだと思う?」

「……さあ」

「一度、尾行したことがあるの」

「……」

「他に女がいると思って。そしたら、女装バーに入つたから、びっくりしちやつた」

芳美は、窓辺から空を見上げていた。

「……言えなかつた。馬鹿にされると思って」

「あら、どうして? 立派な職業じゃない」

顔を向けた芳美が微笑んだ。

「……えつ?」

それは、意外な答えだつた。

「だつて、あなたが好きでやつてるんでしょう? あなたの天職なのよ。きつと

「……かな」

思いもしなかつた言葉が芳美の口から告げられていた。

「……母が死んだの。末期がんで」

「えつ?」

「で、東京に引っ越そうと思って。会社にも近くなるし」

「……」

「アパートでも借りるわ」

「な?」

「ん?」

「……一緒に暮らさないか」

「えつ?」

「……言うのが遅くなつたけど、……結婚しないか」

「……本気なの?」

「ああ。……何が大切なのか、分かつたような気がする」

「……あなた」

芳美は傍に来ると、俺の手を握つた。  
「悪かつた。気付くのが遅くて」

「ううん」

「時間帯が逆になるが、いいか？」

「ええ。これまでのよう、休日にいっぱい甘えるから、大丈夫」

そう言つて、優しい目で俺を見つめた。

大切なものが何かを教えてくれた芳美に感謝した。そして、俺を分かつてくれていたのも芳美だ。少し遠回りしたが、芳美が三十歳になる今月の誕生日に籍を入れよう。芳美との新たな生活に、俺は大きな夢を膨らませていた。――

完